

# たはら 歴史探訪 クラブ 其の83

TAHARA  
History Inquiry  
Club

まぼろしの古窯、渥美焼 2

〜藤原顕長の壺の発見〜

前回の「黒い壺」に引き続き、渥美窯が世に出るきっかけとなった事件を紹介しましょう。

渥美半島でかつて焼き物が焼かれていたことは、まったく知られていなかったわけではありません。江戸時代の歴史書にも、神戸町の谷ノ口、新美、市場に「皿焼穴」、つまり陶器を焼く窯があったとの記録があるのです。しかし、それがいつの時代か、だれによって焼かれていたかの記述はなく、そのころにはま

たく人々の記憶から失われていたようです。この焼き物、明治の終わりから大正時代には、行基（奈良時代の僧）が指導して焼いたとされるものに似ていることから、奈良時代の須恵器の窯として理解されていたようです。大正11年に指定された六連町の国の史跡「百々陶器窯跡」はまさしくこの理解で、奈良時代の窯として指定されたのです。しかし、畑の隅や山からたびたび見つかる茶わんや甕の破片に、地元の研究者はす

るどく注意を払っていました。

昭和25年（1950年）6月に、田原市芦町平岩古窯で、藤原顕長の銘の入った壺片が出土し、翌年には文章として報告されました。その後、昭和31年に小野田勝一さんをはじめ



大アラコ古窯跡から見つかった藤原顕長の壺片

とする野田史談会が、渥美窯の解明という目的意識のもと、大アラコ古窯に学術的なメスを入れたのです。その後の渥美窯発掘のさきがけとなる調査でした。

昭和40年、日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会の調査をはじめとする2度の調査を経て、この壺の全容がわかる短頸壺や多数の文字入り陶片が出土しました。この壺に刻まれた藤原顕長（1117年〜1167年）は、1136年から1155年にかけて2度、三河の国司となった人物でした。つまり、この壺はこのいずれかの時代に焼かれたものなのです。これと同じ壺は、愛知県陶磁資料館（伝鎌倉出土）、三島市三ツ谷新田・山梨県富沢町の壺などが知られています。伝鎌倉出土の壺以外は、見つかった場所やそのときの様子が知られていました。この壺は、経塚でお経を入れる容器として使われていたことが明らかにになりました。

通常、このような焼き物は、記録として残されていないなど、知り得る情報が少ないため、焼き物が見つかった状況、形の特徴を相互に比べ、時代を推定していました。しかし、苦勞して推定したその時代も、絶



大アラコ古窯跡現況

対的に正しいという保証はないのです。焼いた場所と、使われた場所がつながっただけでも大変な発見なのに、この壺は、いつ、どこで、だれが、何の目的で焼いたかがわかっていないのです。すなわちこの壺は、この時代に焼かれた焼き物としては、奇跡的な情報を持った壺なのです。

大アラコ古窯跡は、平安時代終わりのの焼き物の生産の様子や社会の情勢までわかる重要な遺跡として、昭和42年に国の史跡に指定されました。これらの研究に携わった方々の熱意に敬服するばかりです。（増山）  
経塚については次号で紹介いたします。

文化財課（華山会館2階）

23局3531 FAX 22局3811